



TITLE:

經濟道と經濟術(一)

AUTHOR(S):

作田, 莊一

---

CITATION:

作田, 莊一. 經濟道と經濟術(一). 經濟論叢 1922, 14(2): 316-334

ISSUE DATE:

1922-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127872>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號      第 十 四 卷

大正十一年二月一日發行

## 論 叢

最低生活費免稅論

法學博士 小川郷太郎

植民政策是非

文學博士 原 勝 郎

小作制と小作法

法學博士 河田 嗣 郎

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊 一

海運に於ける競争と獨占

法學士 小島昌太郎

## 時 論

我邦消費稅の體系を論ず

法學博士 神戸 正 雄

## 說 苑

リッケルトの價值體系

文學博士 米田庄太郎

舊尾張藩に於ける地割制度

農學士 奥 田 彥

## 雜 錄

「戰前戰後國富統計」を讀みて

法學士 沙見 三 郎

## 經濟道と經濟術 (一)

作 田 莊 一

## 一 緒 言

古より東洋では道を尙び西洋では術を重んずる傾向がある。老莊教や原始佛教は道を至上の境地にまで高調したるものであり、儒教は六藝の如き術にも心を傾けて居るが道を見ること遙かに其上にある。古代の日本民族は儒教及び佛教の渡來したるとき是等と區別する必要に驅られて始めて神道なる名辭を造つたが、斯く固有獨特の道に全民族が歸依するほどに道の意義を重んじて居た。更に我が國民は敷島の道と謂ひ茶の會の道と謂ひ武藝はもとより演藝遊戲の末技に至るまで其々の道を唱へ、道に伴ふ術までも之を道の中に包攝し術の間に志ざす所の道を遺却すまいと心懸けて居る。之を古代歐洲人が「術は長く生は短し」*Arts longa, vita brevis*と讀へて術の中に道を包含せしめたるに比ぶれば正に反對の行方である。基督教は無論、道を尙んで居るが、其とも猶太教の律法に反抗して立てるだけに寧ろ熱烈なる情意の發露に傾いて、東洋人が斯道又は外道の名に於て力爭するほどに道其のものを強調するものでない。殊により多く希臘思想を基調とする西洋文明は美術及び學術の著大なる進歩に由つて術の意義を東洋人の考ふるよりも遙かに高處に置いて居る。従つて西洋語には東洋語の道に該當する適切なる言葉がないと同時に、又東

洋語の術士や藝人と云ふ言葉は西洋語の「アーチスト」に比べると其意義に著しい輕重の差がある。今日我等の用ゆる藝術なる言葉は漢字に托せる西洋語と云つてよい。

比較的に見れば道は主觀的態度に偏して是非を争ひ易く、或は思想上に於て空しき討論を重ね或は實行上に於て互に排擠すること多きも、術は客觀的に優劣を判じ易く、漸次に練磨改良を加へて進歩の跡が歴然として現はるる。西洋文明が東洋に比して進んで居ると見ゆるのは主として此の術の業績であると言ひ得らるる。併し術の文明は一たび道に就て懷疑の岐路に立つときは、驚くべき人工の結果たる幾萬噸の浮城をも一擧に水泡に歸せしむるやうな運命に遭はないとも言へぬ。勿論、非道の術をも是道の術に轉換應用する餘地はあるが、同時に又術は道に従つて用ゐらるゝと云ふ原則は動かすことは出来ない。道と術とは我等の生活を保持進展せしむる二大動力であつて、道に由つて術を用ゐる術に由つて道を全うする。二者其一を缺くことは出来ないが人生に於ける價值より見れば其間に差別を立てゝ取扱はねばならぬ。

現代は價值轉換の時代と言はれて居る。果して轉換を要するか或は補充を以て足るか、孰れにしても生活の各方面に於て術の文化の上に立つべき道の文化が甚しく動搖し思議せらるゝ時代である。殊に其が經濟生活に於て顯著である。我等は今日箇人主義と客觀主義と相結べる經濟生活に反抗して社會主義及び主觀主義の經濟生活を主張するが如き奇妙なる道の混亂を見る。産業革命以來驚くべき發達を遂げ來つた巨大の經濟術は「勞働は商品なりや」の一問が發せらるゝや否や急に其の用途を取調べられ功罪の審判に付せられんとして居る。今は何人も經濟術の依つて立

つ所の經濟道に深く思を潜むべき時代に際會した。

我等は如何なる經濟道に由つて居るか、又由つて進むべきか、其の道の下に如何なる經濟術を用ゐて居るか、又用ゆべきか。是等の問題に答ふるのが經濟學の重要な使命である。併し此の道と術とを攻究するに當つては先づ經濟道及び經濟術其ものゝ意義を闡明し置く必要がある。是まで道德と經濟との關係并に經濟と技術との關係は多くの學者に由つて說かれて居るが、經濟の道と術とに關する概括的説明は餘り見當らないやうである。余は此點に就て聊か卑見を述べ大方の此正を仰ぎたいと思ふ。

## 二 經濟と技術

經濟道と經濟術とを對比して考究するとき先づ吾人の參考とすべき見解は獨逸學者が盛んに論議する所の「經濟と技術」Wirtschaft und Technikの意義である。經濟上の問題に就て經濟問題と技術問題とを考察するのは獨逸學者の一特色であつて、大多數の經濟學者は此の二者の意義及び關係を説き、又經濟及び技術と題する専門の定期刊行物が三種もあるほどである。而して獨逸學者の論ずる經濟と技術に關する有力なる見解は大體に於て之を三通りに分類することが出来る。一、經濟主義の見地に立つもの、二、目的及び手段の見地に立つもの、三、對自然關係及び社會關係の見地に立つものは是れである。以下順を追うて其等の所説を調べて見たい。

### 其一 經濟主義の見地に立つ見解

獨逸に於て經濟と技術の問題を論ずる者は多く「ヘルマン」の見解より出發するを常とする。彼は次の如く説いて居る。<sup>1)</sup>

人が生存欲を満たさんとするに當つては次の二様の行動に出づる。第一に彼は其の望む時と處とに於て望む所の質を有する生活必需品を採取し産出せんとする。其際彼が全身心を勞する點は願望を遂ぐるが爲めに適當なる品質を有する財を獲得するにある。斯かる行動は之を技術と稱する。第二に彼は財を獲得するには勞働の量を計り、願望を遂達するには勞働によつて獲たる産物を節用し以て與へられたる一定量の手段にてなるべく多く願望を充たせんとする。斯く願望遂達の一定範圍に於て財の獲得及び使用を量の方面より排接する場合には之を經濟と稱する。……技術は經濟其ものゝ一部と考へられたが其は謬りである。技術は財其ものを獲得する努力であるが、經濟は之に反し願望遂達の目的の下に技術的努力をなすに當り勞働や貯蓄物の使用を量的に制御するのである。

「ヘルマン」は財の質に着眼するのが技術であること云ふも、是は後の人々が指摘する如く文字通りには穩當でない。謂ゆる技術に於ては勞働量や資本量を考へないとしても求むる所の財に就て品質の外に數量をも要望するからである。されど「ヘルマン」の眞意は財の質や量の點に存しないで、産物を求むる際にはなるべく勞働及び資本を少しく用ひ、願望を遂ぐる際にはなるべく産物を少しく用ゐんとする量的考慮あるや否やに由つて經濟と技術とを區別せんとするにあると思ふ。彼は生産を説くに當りて經濟的活動と技術的活動との差を擧げて、技術の仕事は産物が願望遂達に適するや否やの點に於て審査を受くるに止まるが、經濟的には産物に過ぎ込まれたる價值と産物其ものの價值とが較量せられなければならぬと謂つて居る。<sup>2)</sup> 要するに彼の見解は謂ゆる經濟主義に據る生産及び消費若くは生産及び消費に於て經濟主義に準據する其事が經濟であり、此

1) Hermann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen. 2 Aufl. 1874. S. 10. 11.  
2) Hermann, a. a. O. S. 144. 145.

主義に據らざる生産が技術であるとなすのである。

古い學者であつて「ヘルマン」と略ば同様の見地から經濟と技術とを區別したるのは「バウエル」である。所説の要點は左の通りである。<sup>3)</sup>

人は願望を遂げんが爲めに活動する。此の生活目的を達するには何等かの手段を準備するを要する。生活手段を求むる活動は廣義に於て凡て技術であるが其中に全く異なる二方面がある。其一は單純に生活手段其ものを求得せんとする活動であり、其二は生活手段に於て或る具體的價值を求得せんとする活動である。前者を技術と謂ひ後者を經濟と呼ぶ。技術としては求むる所の生活手段が期したるが如く現前すれば事終るが、經濟としては求むる所の手段を手段として見るのでなく専ら其手段に認めらるべき具體的價值の發生を目標となし、又一の手段を得る爲に他の手段を犠牲とする場合には兩手段に存する具體的價值の剩餘を生ぜしめんとする。技術は手段の求得其事に腐心するのみであるが、經濟は已存の手段は毫も無益に用ゐず、所望の手段はなるべく大なる具體的價值あるものたらしめんとする。技術は性質として自然の法則に遵ふを要するが、經濟は純然たる精神的活動であつて技術と全く異なる淵源より發し手段の評價と云ふ認識作用に其根柢を有する。例へば同じく家屋を建つるにしても、經濟家は家屋を一の具體的價值と見て建築に由つて幾許の價值が得らるか、又其爲めに幾許の價值を犠牲とすべきかを考へて事を決する。之と異り技術家は剩餘價值に頓着なく、唯だ經濟家より受取る材料を以て家屋其ものを建造するだけである。

「バウエル」の此の見解も要するに經濟主義に據ると否とに由つて經濟と技術とを區別するものである。近頃の學者にして此種の見解を簡明に説けるものは「ワグナー」である。<sup>4)</sup>

如何なる經濟生活にあつても密接に相關聯し而かも甚しく其の趣を異にせる二方面を區別するを要する。其は夙に「ヘルマン」が始唱したる所にて技術及び經濟「Technik und Oekonomie」の二つである。技術的活動は願望遂達の爲に適當なる處と時に於て適當なる品質と分量とを有する各種所要の經濟財を獲得せんとし、經濟的活動は能ふ限り經濟主義に據りて經濟財

- 3) Bauer, Ueber die Unterscheidung der Technik von der Wirtschaft. (Vierteljahrsschrift für Volkswirtschaft und Kulturgeschichte. J. II. B. III. 1864. S. 33-50.)
- 4) Wagner, Grundlegung der Politischen Oekonomie, 3 Aufl. T. I. S. 350.

を獲得し使用せんとするにある。技術と經濟とは互に相影響する。然れども經濟は技術に與ふるに規矩と標的を以てし且つ其の指針とならなければならぬ。而して技術なくんば何の經濟生活もあり得ない、又經濟なくんば經濟生活は無效に終る外はない。

「ワグナー」の所説は經濟主義を以て經濟と技術とを區別する代表的見解と見て差支なく、「フィリップス・ウィチ」其他多數の獨逸學者の所説も之に據り、我國の經濟學書も多く是に倣つて居る。此種の見解は通例、技術上の成敗と經濟上の成敗とを別つ場合の如く殆ど常識となれるほどに通説となつて居る。されど少しく其内容を檢討するときは其中に重太なる缺點の存することを否み得ない。後に挙ぐる如く「ノオイグト」や「リーフマン」の諸家は已に其の弱點を指摘して居るが茲には唯だ自分だけの見地の上から此の通説を批評して見たい。

少さい問題ではあるが此種の見解は技術の方は財の獲得のみに限り、經濟の方は財の獲得及使用に及んで居る。されど經濟に於て願望遂達の爲めに產物を節用するに對して技術の方にも同じ目的の爲めに經濟主義を離れて單に財の效能を發揮せしめるやうに之を使用する技術があり得る。故に此種の見解は少しく補充して、經濟主義に據るゝ否とによつて生産技術及び消費技術と生産經濟及び消費經濟とを對立せしむるを要する。

經濟主義に據ると否とを以て經濟と技術とを別つ見解を考ふるに、先づ經濟即ち經濟主義的活動なりと見ることを許すとしても、斯かる活動に對立する他の活動が觀念上直ちに技術であると見るのは穩當と思はれない。凡そ活動には趣旨と方法との二要素がある。其の方法が何等かの智能技巧を要するとき之を技術と呼ぶ。生産技術と云へば一種の方法であつて其は一定の財を出現せしむることと趣旨として之を達する爲めの方法である。而して其の趣旨が單に所望の財を出現



せしむるに止まるか又は所望の財を得るに由つて失ふ所の利益よりも大なる利益を得んとするにあるかによつて夫々の趣旨を達する方法も異つて来る。即ち前の場合には生産上有效なる方法を採り後の場合には生産上有利なる方法を探る。經濟主義に據るや否やは活動の性質を區別することとなり、其の異質の活動に於て夫々一定の趣旨があり、又之に伴ふ方法があり技術がある。若し經濟主義的活動即ち經濟と見るならば其の活動の一要素としての經濟的技術がある譯にて、其は非經濟主義的活動の技術と對立するものである。例へば園藝術にも營利の爲めにするものと道樂の爲めにするとの別あるが如し。「バウエル」が經濟は純然たる精神的のもので生活手段の評価と云ふ認識作用に基き技術と全く淵源を異にすると云つて居るのは、已に其れ自ら我等の活動の意向又は態度に經濟主義的と非經濟主義的との區別あることを示して居る。従つて「ヘルマン」以來の通説たる經濟と技術との區別は、有利性に着眼する活動の意向と、有效性に着眼する活動の意向と并に前者を實現する技術と後者を實現する技術の二通りの區別を斜に取り來つて經濟と技術と名づけたものと見るならば、初めて意味が明かになるのである。但し斯かる概念の造り方は望ましくない。此點に於ては後に述ぶる如く「フオイグト」が已に經濟主義に據ると否とに従つて技術の中に純技術と經濟的技術とを區別して居る。

次に問題となるのは技術と別つべき經濟は果して經濟主義的活動と同一なりやと云ふ點である。謂ゆる經濟主義とは失費價值以上に收得價值を求めて剩餘價值を出ださんとする意向であり、其の價值とは財物の存在を可とするや否や、可とする程度の多きや否やを判定する所の經濟價值な

ることは言を須たない。然るに斯かる評價には交易組織を前提とする營利經濟上の評價と交易營利を離れて單純に自己満足と計る場合の評價とがある。世間にて經濟上の成敗と言へば營利經濟上の成敗を指すを通例とするが其外に自足經濟上の成敗もある。衝動力に驅られて盲目的活動となる場合の外は何人と雖も剩餘價值を考慮せずして行動する者はない。收得價值に熱注して失費價值を顧慮しないと見ゆるのは結果に餘りに大なる價值を認むるが故に其程に價值を認めない局外者より見て失費を償はぬやうに見ゆるだけである。例へば鏡玉工場が試験的に未曾有の大徑鏡玉を製造し、政府の兵器工廠が機密を要する兵器を製造する如き、營利經濟上の損得を顧慮しなくとも剩餘價值を求めぬものではない。勞費や收獲に就て何の較量をもなさざる衝動力又は無限の勞費を辭せざる一事至上主義の活動の如き稀有の場合を除くならば、財の獲得には凡て經濟主義が遵奉せられて居る。斯く見るときは經濟主義的活動即ち經濟と見て之を技術と區別することは出来なくなる。其は寧ろ自足經濟的技術と營利經濟的技術との區別、又諷旨より見て單に自足經濟と營利經濟との區別なりと見て初めて意義ある對稱となるのである。其にしても近代の經濟が交易營利の組織が勝つて居ると云ふだけにて幾分現在にも存在し過去に於ては可なり廣く行はれ、將來に於て經濟生活の公共化するに従つて益々増加せんとする非交易的、非營利的經濟を經濟でないかの如く取扱ふことは經濟全般の解釋としては堪ゆる能はざる偏見であると思ふ。

要するに經濟主義に據る經濟と技術との對稱は、技術の依つて立つ根據に思ひ至らず、又主觀經濟に注意を留めないで客觀經濟に偏倚せる立場から出で來れる見解であると評せざるを得ぬ。

或は技術と經濟との名稱に特殊の意味を付して其の缺點を救ひ得るとしても其よりも寧ろ全く其を捨て、別箇の名稱の下に妥當なる觀念を表示するが可いと思ふ。

## 其二 目的及手段の見地に立つ見解

以上の技術と經濟との區別に關する通説に對し改修を試みたるものは是等を目的と手段との關係より考察せんとする見解である。先づ「フオイグト」の所説を略述して見たい。

凡そ經濟活動は之を目的と手段とに分ち見ることが出来る。有限なる手段を以て目的(願望の遂達)の最大量を獲得するを經濟主義となし、其範圍にある活動を廣義の經濟問題と見る。而して其中にて與へられたる手段を以てなるべく最大の目的を達せんとするのが狹義の經濟問題であり、與へられたる目的に對しなるべく最小の手段を以てせんとするのが技術問題である。一事業の經營に於て經濟家と技術家は初めより提携して活動するを要するが仕事の本質上異つた職分を有する。經濟家は先づ手段を調なへ之を如何に用ゆべきかに就て計畫を立つるが、技術家は一定の目的から出發し、其を達する爲めに如何なる手段を要するかを考慮し常に最小限度に於て實行せんことを要求せらる。産物を願望の方に向けて行くことは經濟家の任務であつて、技術家は只だ經濟家の決定した目的を達する爲めに手段方法を求めて之を處理する。要するに技術家は目的を達する方面に於て、經濟家は目的を定むる方面に於て夫々責任を有する。

技術には箇々の場合に施す實際的技術と多くの同様の場合に適用せらるる普遍的技術との別がある。普遍的技術の中には更に單純に一般的に一定の目的を達すべき方法を求むる純技術 *keine Technik* と經濟主義を遂行するために採る方法たる經濟的技術 *Oekonomische Technik* との別がある。此點に於て「ヘルマン」が經濟主義に由つて經濟と技術とを別つ見解は支持し難い。其によれば經濟的技術は技術に屬しないで經濟に屬することゝなつて不合理である。

「フオイグト」が經濟主義に據る技術と然らざる技術即ち經濟的技術と純技術とを區別したのは一見極めて平凡なる考察のやうに思はるゝが、これこそ「ヘルマン」以來の通説を破る最強の根據

5) Voigt, Technische Oekonomie (Wiese, Wirtschaft und Recht. B. II. S. 219, 223, 224, 228.)

となるのである。之によつて始めて技術は方法であり、經濟は方法を惹き起こす所の趣旨であると云ふ見解を生ぜしめ得る。氏が技術家は目的を達せしめ經濟家は目的を定むる責任ありと謂へるは確かに正しい見方である。されど余は氏が目的と手段とを對立せしめ孰れか一方より他方に進むことが經濟と技術との差別を生ぜしむるとなす見解には承服し得ない。技術は已定の目的から未定の手段を工夫し遂行するにあると見るのは正しいが、經濟は已定の手段から未定の目的に進み行くと見るのは穩當でないと思ふ。目的あつての手段であり、手段あつての目的ではない、經濟家が何の目的もなく只だ何かの目的の手段となるであらふと思つて機械や原料を買入れ置き而後に其を用ゆる目的を決定すると云ふが如き場合はあり得ない。外形上漠然置置くが如く見ゆる場合もあるが其際にも何かの目的が豫定されてある。最も多き場合は何の手段も與へられない先きに目的を定め而後に手段に移る、其の手段の場所に技術家が入來するのである。其外に往々二以上の目的を豫定して孰れにも役立つべき手段を調なへ其後に目的を一定することもあるが、此場合にも手段に由つて目的が決せらるゝのではない。豫定の目的は必ず手段を外にして定められ其の一を選擇決定する際にも手段は單に選擇の條件として働くのみにて目的決定の動機とはならない。又稀有の場合なれど目的の豫定すらない時に偶然に受動的に財物が手に入るとき之を何に用ゐんかを考慮することがあり得る。此際とても手段が目的を決する原因でなく手段を得たることが機會となつて願望から目的が決められて來る。若し願望の中に其手段を用ゆる目的を容るゝ餘地がなかつたとしたら、たとえ手段があつても全然目的は定まらない。否な凡て手段は之を用

ゆる目的を有する人にとつてのみ手段であつて、全く目的の決まらない人にとつては手段ですらあり得ない。要するに手段から目的を引出すことは全く不能である。

「フオイグト」が原則的に手段から目的に進むのが經濟問題であり、目的から手段に行くのが技術問題である云ふのは確かに不當の見解であつて、經濟問題は通例では全く手段を外に目的を定め、例外として手段を條件又は機會として目的を定むるものと云ふべきである。併し氏は一方では經濟家は先づ手段を調なへ之を如何に用ゆべきかに就て計畫を立つると云ひながら、他方では與へられたる手段を以てなるべく最大の目的を達せんとするのが經濟問題であると言つて居る此の後の方に重きを置いて見れば、最大の目的と云ふことは目的其ものは決定して居るが目的の質と量とに就て最良の結果を得んとするにあると見ることが出来る。此意味に解すれば「手段より目的に」と言ふことが出来る。されど其だとしてれば目的の決定でなく、一定の目的に對して手段を巧妙に運用せんとする努力に外ならないことになつて經濟と技術との區別が立たなくなつて来る。若し單純に廣義の經濟の中にて、目的の定立のみが經濟であり手段の運用のみが技術であるとするならば略ぼ二者の區別を明かになし得る。但だ斯く見れば技術の方は一定の目的の下に立つと云ふ點にて其の意義が限定せらるゝが、經濟の方は經濟的技術に對して如何なる特色を有するか尙ほ明瞭を缺く憾みがある。即ち此の場合には生活の諸目的の中にて特に經濟と名くべき特殊の目的と他の目的との關係が指示せられなければならぬ。

茲に手段は目的を決する際の條件又は機會となり得るも其を決定する原因力でない、「手段より目的へ」とは言ひ得られない

と述べたが、或は其を以て單に説明方法の差異に過ぎないではないかと批難せらるゝかも知れぬ。併し余は此の目的の決定と言ふことを重視し、其處に經濟術に對する經濟道の立場があり、「フオイグト」の如く目的と手段とを單に相互的存立と見るべきものでないと思ふ。其點は後に自説を述ぶるときに譲りたい。

「フオイグト」の目的及び手段の見地に沿うて一層精密に經濟と技術との差別に論及したのは「リーフマン」の説である。氏は次の如く説いて居る。<sup>6)</sup>

我等が最小の手段を用ゐんとし又は最大の結果を求めんとするときは之を廣義の合理主義と云ひ、此の二つを結合して最小の手段を以て最大の結果を求めんとする高級の形式は之を狹義の合理主義と云ふ。廣義の合理主義に據り、目的が與へられたるとき之に對して手段を比較し、或は手段が與へられたるとき之に對して目的を比較する場合には、其は孰れも技術である。狹義の合理主義に據り目的と手段とを比較する場合には其が經濟となる。技術にあつては外面的、物質的、數量的に一手段と他手段、又は一目的と他目的とを比較するに止まるが、經濟にあつては目的と手段とが異種のものなる故に二者を一貫する内面的、心的評價によりてのみ比較し得らる。後者の標準は快苦の感情が又は效用及び費用を比較する心的評價に代用せらるゝ貨幣的表明である。貨幣に由つて心的評價が數字的となる。經濟の志す所はなるべく大なる快樂を求めんとするにある、快樂を求むる場合が經濟であるとは言へないが、種々の效用を其の爲めに供用する費用と比較し最大の快樂を求めんとするのが經濟の特色である。然るに技術の志す所は決して快樂の最大量でなく單に外的、物的、量的の成果に過ぎない。我等は數々技術の中に經濟的意向の存することを容易に發見し得る。併し其は必然の場合でなく、技術には經濟を伴はず其だけ獨立せる企圖を有するものがある。

經濟に於ける目的と手段との比較は單に二者を孤立的に比較するのではなく寧ろ總體的に願望を遂達する企圖の上に立ち凡ての效用を顧慮して其等に要する費用と比較する。即ち經濟は二重の比較を試み、先づ各々の目的と手段とを比較し、次に種々の目的を相互に其々の手段にかけて比較する。結局、經濟に於ける合理主義の實現は手段以上の目的、費用以上の效用を

6) Liefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. B. I. S. 319-345.

獲て吾人の收益、*Ertrag* と呼べる剩餘を生ぜしむるに存する。

技術は目的のみ又は手段のみを比較するのであるから、快苦の感情又は貨幣の評価に由らないで外的物的に比較することが出来る。併し同時に又或る目的を達する手段が貨幣又は労働の如き經濟より引出し來れる費用の概念として見らるゝ場合がある。例へば一定量の砂糖を製造する場合になるべく少量の糖根を用ゐんとする場合に對して最も廉價にて濟まんとする場合の如し。斯く經濟的概念(評價的概念)を以て手段を取扱ふときは之を經濟的技術と云ひ、單に物的外的に取扱ふときは之を純技術と云ふ。併し經濟的技術であつても依然として一の技術たるに止まり經濟とはならない。其故は手段だけは心的評價に據れど目的の方はやはり外的數量的結果を得んとするに止まり、目的と手段とを一貫する內的心的評價を以て比較しないからである。

「リーフマン」の説は頗る複雑に亘つて居るが、其要點は目的及び手段の比較の組合せと比較の見地との二方面より經濟と技術の差別を立つるのである。先づ第一の點に就て言へば、一定の目的に對して數手段を比較選擇することが技術なることは疑ない。但だ比較と云ふは狭く、唯一つしか思付かれない手段を工夫したとしてもやはり技術である。之に反し一定の手段から數目的を比較すると云ふことは穩當でないと思はるゝ。「リーフマン」は一の庭園に花卉と蔬菜と孰れが適するかを比較する例を擧げて居るが、かゝる場合に「フオイグト」ならば之れ經濟なりと云ふべきを、「リーフマン」が技術なりと見るは正當である。併し此場合にも技術と云ひ得るのは、庭園の地質を見て其の花卉生産力と蔬菜生産力とを比較する農業技師の仕事なるが故である。農業經營者として花卉と蔬菜とを比較し孰れを作るべきかを決定するには自足又は營利の如き自ら別に由る所の標準があつて、其の二目的を夫々庭園の生産力に比較して其一を選擇するであらふ。斯か

る比較は「リーフマン」に従へば技術でなく經濟でなければならぬ。茲でも余は目的を比較し決定する場合は其等を包攝する一段高き目的に據り、手段は決定の條件に止まると言いたい。

氏は又最小の手段か又は最大の結果か孰れか一方を考慮するのが技術であり、二者を結合して考慮するのが經濟であると言ふが、我等は多くの場合に二者を結合して考慮する。但だ結果を限定し其以上を要せぬときに最小の手段のみを考慮し、又與へられたる手段が運用に於て一定し居るときに最大の結果のみを考慮する。合理主義即ち經濟主義が一面的であると双面的なるとに由つて我等の行爲に性質上の差異を生じ其處に技術と經濟とが岐るゝとは考へ得られぬ。唯だ氏は目的と手段との双面的比較なるときに始めて內的、心的評價が現じ來るとなし、此の心的見解を極めて高調し居れるを見れば、氏の双面的比較の主張は寧ろ心的評價説を引出す徑路と見ることも出来る。其の證據には手段のみを比較する技術に於ても心的評價を以てすれば經濟的技術となると云ふを見ても斯く察し得らる。此の主張を換言すれば、手段のみの評價たる經濟的技術は半經濟とも云ふべく、目的及び手段を通じて心的評價をなすとき全經濟となる譯である。之を一層抽象して見れば氏が技術と見ず經濟と見る所のは實に心的評價と云ふ比較の見地に基くものであつて比較の組合せは寧ろ第二次的意義を有するに過ぎないのではあるまいか。氏は又、手段の比較に就てのみ心的評價たる費用の概念を以てする場合を擧げて居るが、其は目的の比較に就ても心的評價たる効用の概念を以てすることが出來よう。氏の例を借れば、一の庭園から作らるべき花卉又は蔬菜の孰れが多く收入を齎らし得るかを考へ、若くは單に何に由つて一の庭園から



最多額の收入を擧げ得るかを考ふるが如きは、一定量の砂糖を最も廉價に得んとすると同様なる心的評價であると思ふ。尙ほ進んで言へば、目的と手段とを比較する場合に内的心的評價に由ると言ふは、手段に就ての心的評價と目的に就ての心的評價とが結合したものであつて、其際に重要な着眼點は目的と手段との比較よりも寧ろ一貫せる心的評價其ものにあると見るべきであらふ。尙ほ氏は經濟と技術に關する從來の見解は凡て外的物的見解であるに對し、自ら始めて内的心的見解を立て、從來の謬見を改むるものであると言つて居る。従つて氏の所説の功過は氏の心的見解の當否如何に由つて定まるものと思ふ。

「リーフマン」の主張する心的評價と言ふのは第一次的には快苦の感情を標準となし、第二次的には之に代つて效用及び費用を表示する貨幣を標準とする較量である。快苦の感情を以て價值判定の標準となす説は可なり廣く行はれて居るが之を財の獲得の如き經濟生活に就て的確に適用し能ふや否やは蓋し疑問である。我等は感情の量よりも寧ろ質を追うて活動する。假りに量のみに由るとしても快感のみ又は苦感のみならば其程度を定め得ると言へるが、財を獲得するに當り種々の目的を其々の手段にかけて相互に比較するとき、手段喪失の苦痛と目的取得の快樂とを比較して剩餘快樂の最大量を求むると言ふが如きは、果して經濟活動の確實なる標準と見られ得るであらふか。否な寧ろ内的、純主觀的な感情は剩餘價值を認むる標準としては余りに不適當なる流動性のものなるが故に固定せる外的尺度として貨幣が發明され使用さるゝに至つたのである此點に於て「リーフマン」が評價の標準を感情又は貨幣と云へるは一見正當に思はるる。併し氏が

感情より貨幣に飛躍して、技術に於ける財其ものゝ比較は物的であり、經濟に於ける貨幣的評價は心的であると言へるは如何であらふか。財其ものを比較しても、異種財に於ける質の比較は勿論、同種財に於ける量の比較と雖も、其の根抵は心的である。唯だ量の比較は單純なる故に強く感情を煩はさないだけである。進んで一層感情を煩はすまいとして質の相違を量の差に取直はせるのが實に貨幣的評價である。貨幣的評價は財其ものに就てなす箇々の比較を進めて、諸財を通じて行ひ得る普遍的比較となせるものである。従つて貨幣的評價は感情評價に代れるものとしても感情より直に移つたものでなく、其間に財其ものゝ比較が挿まつて居るのである。斯く見るときは財其ものゝ比較も貨幣的評價も共に根抵に於ては内的心的であり、表面は就れも外的物的である。されば「リーフマン」が技術と經濟とを別てる比較の見地の相違は物的又は心的と云ふよりも寧ろ、評價の普遍的標準たる貨幣に由るものなりや否やに歸着しなければならぬと思れる。財其ものゝ比較が物的であり貨幣的評價が心的であるが如く思はるゝは、前者が特殊的（或は具體的）較量であり後者が普遍的（或は抽象的）較量であるからで、特殊具體の財其ものに即しないと云ふ點より云へば後者がより心的とも言へやう。併し評價の根據たる感情からの距離は前者よりも後者の方が遠ざかつて居る。此點では貨幣的評價の方が財其ものゝ比較よりも一層外的物的であると云つて可い。恰も財其ものゝ比較に傾く純朴なる農夫よりも貨幣的評價に於て鋭敏なる商人の方がより外的物的の價值判定をなすと云ひ得らるゝが如きである。

貨幣は直接に快苦の感情を代表するものでなく却つて社會力の一たる貨幣によつて個人の純主

觀的なる感情が制約せらるゝのである。貨幣は交易經濟に伴うて發生せる購買力であり、社會的に支持せらるゝ交易權能であり、箇人間の各種の要求を突き合せて普遍化(或は抽象化)する所に其の一貫的數量的評價の能力を取得するものである。故に社會と交易とを離れて貨幣はない。交易を離れて全く孤獨の主觀的に一貫せる數量的評價をなし得る如く考へらるゝも其はやはり交易的評價の反射である。假りにそうでないとしても複雑なる快苦の感情が簡單に數によつて整理せられ得るとは信じられない。斯く見るときは「リーフマン」が感情又は貨幣による心的評價と云ふのは畢竟、交易經濟を前提とする貨幣に由つて普遍的數量的評價をなすのであり、其が財其ものゝ特殊的比較と對立すると云ふに歸着するであらふ。

「リーフマン」の心的見解の主張は氏の自ら唱ふる如く確かに從來の經濟と技術の區別に對する一大改修である。其は經濟の意義を現代經濟組織の基調に求めて廣義の經濟生活に於ける二つの異つた特相の下に經濟と技術とを區別したものである。併し突込んで言ふならば此の區別は要するに我等の經濟生活の身體と衣裳(恰かも「カーライル」が衣裳哲學に言へるが如き衣裳)との區別と見る事が出来る。他の語に離へせば其は自足經濟(孤立の意義でなく自己満足の經濟)と營利經濟(商業の意義でなく社會に於て剩餘利益を求むる經濟)との區別ともなるのである。蓋し氏は經濟を以て貨幣的評價に由りて剩餘を求むるにありと云ふからである。斯く見れば氏の説は形に於て「フオイクト」の説の如く目的と手段に着眼せる如く見ゆるも、實は經濟主義(無論其の内容を改修したるもの)の細別に由つて經濟と技術とを區別したるものとなる。さすれば此の見解に對

しては先きに自足經濟主義及び營利經濟主義に由る區別の見解に對して述べたと同様の批評を加へ得るであらふ。

明かに目的及び手段の關係から經濟と技術とを區別したのではないが、此の部類に收むべき有力なる見解は「ゴットル」の所説である。氏は先づ種々の技術の中にて經濟と對稱するものを外界と交渉する技術即ち實技術 Realtechnik に限定し、左の如く二者を區別して居る。

經濟も技術も共に吾人が外界に對する特有の狀態に基く。吾人は二重に外界に依存する。先づ吾人は外界に於てのみ遂げられ得る願望を懷く點に於て外界に依存する。次に其願望を遂げんとして外界と交渉する行動を餘儀せらるゝ點に於て外界に依存する。第一の關係から經濟を生じ、第二の關係から技術を生ずる。技術は經濟の爲めに起こり、經濟は技術に由つてのみ遂行せらるる。

外界は必しも吾人を好遇しないで、偶然を以て吾人の存在を脅かす。此の偶然を制して吾人の存在を保つが爲に専心經濟を事とし、又行爲の結果を有效ならしむる爲に之が條件を知り且つ充たさんとする。其條件を教ゆるものは、技術である。經濟も技術も統一して見れば偶然よりの解放である。其中に於て願望遂達の行爲其ものを規定するものは經濟であり、箇々の行爲の實施を規定するものは技術である。二者共に偶然を排斥せんとする秩序であるが、經濟は願望遂達の行爲に於ける秩序であり、技術は其の行爲の實施に於ける秩序である。

外界の財は吾人の願望に比して有限である。吾人は欲するだけ能ふものでない。其處に生活難を生ずる。生活難は實に經濟の支配者となり又技術の存在基礎となるものである。

從來經濟主義に據つて經濟と技術とを別つもの多きも其は謬つて居る。謂ゆる經濟主義は之を理性主義と呼ぶべく一切の行爲を支配する。技術は生活難より生ずるものなれば此の理性主義こそ技術の最奥の本質ななすものである。而して謂ゆる經濟主義に於て效用と失費とを比較し最小の失費を以て最大の效用を求むると云ふことは不可能事である。一の手段は二以上の日

的を遂げしめ得る、一の目的に用ゆれば他の目的の遂行を妨ぐる。故に經濟に於ける理性の要求としては、一の目的を遂げんとするときはなるべく他の目的を妨げざる如く爲せと言ふにある。目的の遂行に入らば、一定の結果を得んとするときは最小の失費を以てし、一定の失費を以てするときは最大の結果を得るに努め、之を纏めて言へば常に結局に於て最小の失費に止まる如く行へと言ふことが技術に於ける理性主義となるのである。

此の見解は大體に於て「フオイグト」の説と同様であるが、而かも後者が手段より目的に進むのが經濟であると言へると異り、願望の遂達其事の秩序が經濟であると言へたるは正當である。「ゴツトル」の見解は甚だ直截簡明である。其は經濟主義を單に理性主義として問題より遠ざけて了ひ又經濟も技術も共に自然經濟に限定して社會經濟及び營利經濟を格段に考慮しないからである。

「リーフマン」其他が經濟主義の内容に立入り、又技術に於ては自然經濟を主として、經濟に於ては社會經濟を重んじて觀察したることが問題の解釋を紛糾せしめたる原因であらふが併し解釋としては其處へ進入して行かなければならぬ。「ゴツトル」は問題を限定することに由つて難關を脱したが、同時に問題を包括的に解釋したとは言へない。従つて技術の方は經濟の下に立つものなれば之を實施の秩序と云つても解し得らるゝが、經濟の方は第一次的のもの故、單に自然界より受くる生活難を排除する秩序と見るだけでは經濟の一面を語るに過ぎない。丁度この點から出發し「ゴツトル」と全く異つた方角から經濟と技術とを觀察したのが次に擧ぐる社會法的經濟學派の見解である。(未完)